

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成 28年 5月 12日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科文献文化学専攻中国哲学史専修

職名・学年 博士後期課程三回

氏 名 伊藤 裕 久

助成の種類	平成 28 年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第四屆國際《尚書》學學術研討會		
発表題目	五音五声五行攷——「平章百姓」試探		
開催場所	香港浸會大學		
渡航期間	平成 28年 4月 18日 ~ 平成 28年 4月 22日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	150000円	
	使用した助成金額	150000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空機運賃及付帯費用 59000円	
		宿泊費 33700円	
		国内交通費 7400円 現地滞在期間交通費 14900円	
資料制作費(會議論文のネイティブ補助) 35000円			
(上記現地交通費以外は全額本助成により充当。現地交通費は本助成充当分のみ記載し不足分は私費により補填。なお香港ドルでの支払い分については、現金兌換時の実質兌換率(1香港ドル=16円)によって日本円換算をおこない、百円以下については四捨五入した)			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回の助成によって滞りなく学会参加および報告がおこなえました。まことに感謝申し上げます。研究者によっては学籍上と異なる名前で活動を行っている方もいるため、学術上使用している名前にあわせて申請・情報公開を行っていただければ、より円滑に学術活動が行えるかと思えます。		

研究集会名：國際《尚書》學學術研討會

このたび4月19～20日に香港浸會大學でおこなわれた國際《尚書》學學術研討會は、國際《尚書》學會と開催校である香港浸會大學中國語言文學系による共催で行われた。総勢68名を超える學者があつまり、《尚書》學の諸問題について討論した。68余名のうち、會長である錢宗武氏をはじめとするその大半は北京大學、清華大學、復旦大學、南京大學、中山大學、吉林大學、浙江大學、武漢大學、四川大學といった大陸の學者であるが、アメリカ、カナダ、ロシア、日本、台灣、香港、マカオなどから20名近い出席者があつた。この規模は一つの經書（儒學では十三經といって十三の經書がある。）に対する學會としては最も大きい規模で開催されたものの一つといてよい。

このたび學會のテーマは「以文會友、以友輔仁」である、つまり本學文學部の同窓會と同じ由来である、つまり《尚書》の道を昂揚し、研究成果を共有し、さらなる発展をのぞむことである。今回の學會は國際《尚書》學會成立以來第六回目の大型の國際學術會議であり、國際《尚書》學會の《尚書》研究の深化と、《尚書》研究乃至は經學研究に対してのつよい影響をあたえていることをしめしている。

また内容も『尚書』の文字學、音韻學、訓詁學、思想、政治、考證學、辨偽學、出土文獻、邏輯學、學術史、域外傳播などといった広い分野に及び内容的にも非常に充実した會議となつていいる。そのため會議論文集もぶあつものとなり、4センチ近い厚さとなつていいる。また、其の他に追加の論文が多く有り、それらもあわせてのせてみれば、實際は5センチに近い分量の論文があつたこととなる。

なお本學會のテーマでもある『尚書』という經書は、會長錢宗武氏の大會挨拶の言葉を借りれば、『尚書』の學問は大道の學であり、如何なる時代においても經世濟民の効果を持ち、現代的価値観においても、おおいに學ぶべきものである。

基調報告が五名あり、一日目に三名、二日目に二名、それぞれ報告時間は20分であり、各日の始めに行われた。その他は人數が多いことからA、B、Cの三組に分かれての分組討論であり各組三人づつ、一人当たりの発表時間は15分ということで報告が行われた。分組討論は全七場あり、本人は第三場C組での報告となつた。司會者はロシア人マヨロフ氏である。第三場C組はマヨロフ氏の言葉をつかえば、演壇にいる4人がロシア、大陸、香港、日本とすべて異なる最も國際的な一組である。報告内容についてはその場で特に質問らしい質問はでなかつたが、のちにその場で聞いていた台灣の蔡氏から結論部分についての同意を得るとともに、貴重な言葉をいただいた。

閉幕式では、錢宗武會長から第五屆國際《尚書》學學術研討會が蘭州で行われることが発表され、それにむけての参加要請があると同時に、その準備をするようにとの言葉があつた。

なお、本會議で発表した論文については、報告者自身による修訂を経たのち、2017年2月に出版予定であることを申し添えておく。

學會参加の意義は報告そのものにもあるが、無論多くの學者と知り合うことにもある。本學會では舊知の學者も多くいたものの、南京大學の徐院長や政治大學の車教授、北京大學の程博士等新たに知り合えた學者も多く有り、頗る収穫があつたとしてよい。

それらの學者と最も話す機会がおおかつたのは晩宴である。晩宴では偽ブランドの見分け方のような世間話のようなことから、報告内容に関する議論まで幅広い話が繰り広げられ非常に有意義な時間であつた。

また、開催校の香港浸會大學からは『人民中國學報』および『宋元文學與宗教』の二冊の本の贈與をいただいた。この場を借りてお禮申し上げる。

収支関係については他に報告書があるため、詳しくはゆづるが、主に飛行機代を含めた交通費と宿泊費、資料製作費（中國語原稿作成補助費）に用いた。香港ではおおむね時間の都合によりタクシーによる移動となり、また空港と会場までの長距離の移動もあり、無論それぞれ一度あたりの額を日本と比較すれば安いとはいえるものの、総じて見ればけつして小さくはない金額となつた。

末言にはなるが、本學會への参加費援助を行っていただいた京都大學學術教育振興財団には厚く御禮を申し上げる。